

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成20年度派遣報告書

——派遣国：エジプト，アラブ首長国連邦 機関：カイロ大学（ダールルウルーム学部），アラビア語アカデミー（カイロ），アラビア語協会（シャルジャ）
語学名：アラビア語 派遣期間：H21.1.27-H21.3.31——

平成18年編入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程5回生
竹田 敏之

自身の研究テーマについて

「現代アラブ世界の形成とアラビア語教育の普及—現代アラビア語論の展開とカイロ大学ダールルウルーム学部の役割—」

22の国からなる現代アラブ世界を「アラブ」たらしめる最も重要な要素は、その広大な地域と多様な人々を結ぶコミュニケーション媒体、すなわちアラビア語とそれに立脚する文化である。現代アラブ世界は、多言語社会のオスマン帝国が崩壊した後、アラブ諸国が独立を遂げる中、「共通語」としての「現代アラビア語」が成立する過程で形成されてきた。

報告者は、これまでの臨地調査で、主としてアラブ連盟やアラビア語アカデミーの活動実態の解明を通じ、このアラブ世界の形成過程を、民族語としてのアラビア語とアラブの連帯性という視点から明らかにしてきた。その際、紐帯としてのアラビア語を論じる共通の場と、それをめぐる学術的・人的ネットワークを「アラビア語ネットワーク」と呼び、現代アラブ世界を紐解く鍵概念として設定した。

本研究では、これまでの調査をさらに発展させる形で、特に、エジプトのみならずアラブ諸国における現代アラビア語論の展開と学校文法の普及に重要な役割を果たしたダールルウルーム師範学校（後にカイロ大学ダールルウルーム学部）と、アカデミーが総力を挙げて編纂中の『アラビア語大辞典』に資金面を含めた参加を表明している UAE の「アラビア語協会」を新たに調査対象に加える。近年のインターネットの急速な普及やグローバル時代の流れにともない、UAEをはじめ湾岸諸国では「外国人労働者とアラビア語の変容」「アラブ性（ウルーバ）と教育」「メディア・アラビック」といったテーマに大きな注目が集まっている。

本調査は、両機関が現代アラビア語の成立と正則語教育の普及に果たす役割を明らかにすることで、現代アラブ世界の形成を論じるための新たな視座を開拓することを一つの目的としている。また、本プログラムが掲げる「地域研究に真に役立つ現地語教育」に関して、特にアラブ世界におけるアラビア語教育機関の情報蓄積および人的交流の促進にも貢献しうる発展的な研究になると考えている。



ダールルウルーム学部の入り口。創立時期（19世紀末）のアブドゥのことば「今やアラビア語は至る所で死に瀕している。しかしダールルウルームでは生き続ける」が学部のスローガンになっている。

研修言語の概要

現代アラビア語は西はモーリタニアから東はオマーンまで、主に北アフリカ、湾岸諸国、歴史的シリアの20を越える国の公用語・国語となっている。また1973年には国連の公用語に認定され、現代世界における国際語としての地位を獲得した。従来アラビア語は、文語（正則語）VS口語（大衆語／方言）というダイグロシア（二重言語使用）の構図で論じられることが多かったが、近年は「正則口語」（知識人が話す共通語としての正則アラビア語）がメディアの共通ツールとして重要な役割を果たしている。

語学研修の内容について

カイロのダールルウルーム学部では、カウンターパートのアブドゥッサブール・シャーヒーン教授の指導のもと、20世紀のタアリーブ運動の先駆けとなった「ダールルウルーム研究会」（1907年発足）に関する調査を行い、特に中心人物であったヒフニー・ナーシフ（1856-1919）に関する資料・情報収集を進めた。また同学部大学院にて「音韻論」（シャーヒーン教授）、「文法原論」（アブー・マカーリム教授）、「文法学」（キシュク教授）の授業を聴講し、先生方と意見交換を行った。

また、前回の調査に引き続き、アラビア語アカデミーを拠点に「文法改革」「ハムザの正書法」「タアリーブ論」に関する調査と資料収集を行った。今回の訪問では、アカデミー副会長カマール・ビシユル教授との面会が実現し、特に、近年発展が著しいインターネットとアラビア語の変容について、新語や専門用語の生成と定着という観点からアカデミーの方針に関する聞き取り調査を実施した。

次の派遣国 UAE では、まずシャルジャにある「遺産復興協会」のシンポジウム「大衆文化遺産の復興」（2009/03/15）に参加した。「ムズーン」誌の編集者ユースフ氏による「オーラルヒストリーと UAE 方言」と題した発表では、同協会が進めている部族方言による格言・諺・民謡等を収集した辞典編纂プロジェクトについて活発な議論が交わされ、報告者も湾岸地域における方言研究の意義と動向について質疑を行った。続いて、同協会編集者のファラジュ氏の協力のもと、「シャルジャ・アラビア語協会」を訪問し、協会長であるディブスィー教授へ協会の沿革と活動に関する聞き

取り調査を実施した。また、同協会の年次大会（2009/03/19）では、報告者の研究テーマ「現代アラビア語の成立とアラブ世界の形成—文法改革を中心に」に関する発表を行った。



カイロ・アラビア語アカデミー副会長のカマル・ビシュル教授と。アカデミーに関する調査にて大変ご協力いただいた。

研修期間中に印象に残った体験や経験

ダールルウルームの授業は専門的でありながら、どれも示唆に富む内容ばかりであった。中でもシャウキー・ダイフの文法改革について現代教育文法の視点から論じるキシユク教授の授業は、報告者の研究テーマにも密接に関わっており、非常に有益かつ研究上の新たな視座を提供してくれた。

また UAE 滞在では、外国人労働者向けのアラビア語教育が近年盛んに議論されている点や、自分たちのルーツ・アイデンティティーとしての部族方言と伝統的口承文化に対する関心の高まりなど、エジプトとはまた違った切り口からのアラビア語論の諸相を垣間見ることができた。特に、血統としての「アラブ」への強い帰属意識は、アラビア語の諸部族方言と正則語（フスハー）の規範性の相関を論じる上でも非常に重要な要素となる。

一見すると出稼ぎ外国人労働者にあふれる社会にありながら、「ウムスィーヤ」と呼ばれる夕刻の集いでは、アラブ詩の朗読会や研究会がいたるところで行われていた。近代的高層ビルの濫立状態の中、詩を重んじるアラブ文化の伝統を肌で感じることは、UAE 滞在の大変貴重な経験となった。

目標の達成度や反省点について

今回の調査では、特に今冬にカイロで開催される ITP 国際会議のための会合もいくつか行った。先生方や現地の研究者との意見交換の中で、国際会議へ向けた前向きな言葉をいただくことができた。特に、アカデミー副会長のカマル・ビシュル教授や、「アラビア語協会」のディブスィー教授への聞き取り調査の実施は、今後の学術的交流と人的関係の構築に大きく寄与し得る貴重な訪問となったと言える。また、ダールルウルーム学部大学院にはシリアや湾岸諸国などアラブ諸国出身の研究者が多数在籍しており、彼らとの議論によって現代アラブ世界におけるアラビア語研究の最新動向を把握できたことは、今回の大きな成果の一つである。

一方、日本における研究の現況を振り返ると、例えば日本中東学会では以前アラビア語によるセッションが組まれたことがある。今後のアラビア語の国際性と将来性を展望すると、国際的発信ツ

ールとしての言語運用能力の向上を目的とした教材開発が、一つのあり得るべき突破口となる。特に論文執筆のみならず学会発表等のプレゼンテーションに関連する独特の言い回しや学術的表現を整理したマニュアル本の類は、かつて英語がそうであったように、今後さらにその必要性が増してくると思われる。



UAE（シャルジャ）での文化復興会議



「シャルジャ・アラビア語協会」委員の面々



「シャルジャ・アラビア語協会」のディブスィー協会長（左から2番目）と協会委員長のスィッディーク氏（右）。同協会の会員として推薦いただけることになった。